

よぬだ ところどころ



第十五号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

下米田の河岸段丘の地下構造 写真は美濃加茂地理情報システムより

注 写真の道を挟んで水田部分が今竹之腰、深渡の部分が高くなっている。

地表面から地下の様子

地表面は、宅地・畑地として利用されていたため、黒い耕作土が表面を覆うが、その下は基盤岩と礫層である。

基盤岩は水流による浸食を受けた砂岩で密度が高く締まっており、削岩機でもなかなか破壊できない岩体である。この岩体の表面が飛騨川に永らく浸食されていたため、表面が摩耗していることがわかる。削岩機で破壊した破片には地層が見られず、表面は灰色をしている。 左写真参照

この浸食された岩石段丘の上に不整合に砂れきが乗っており、その層厚は深い場所ですぐ前後であり、一部岩体の頭は地表面に接している。そのため、耕作には問題となり、人々は耕作に不便にならないように、人力で岩体を取り除いていたが、その苦労がしのばれる。付近に建てられた電柱も規定の深さまで掘りさげるには削岩機で数日を要していた。岩体は飛騨川の流路方向に平行に浸食されており、より浸食の深い部分には砂れき層が堆積し、その溝部分に達すれば、少量の水は十分に得られる。深渡の集落は、この水を井戸で得ており、各家にある井戸の配列は、浸食された溝の部分と同じである。

下流の木曽川右岸には、この岩石段丘と同じ配列の河床がみられるので、この河床が上流からの土砂で覆われた状態を想起すればよいであろう。礫層を構成する土砂は、ここでは砂層はあまり見られず、大小の円礫からなる。礫の径はランダムで、

大きいものは一抱えほど、小さいものは握りこぶし程度で、堆積時の環境を示している。基盤となる砂岩は、建設用骨材として有用だが、破碎する手間がかかるという難点がある。為岡等の水田では、地下の礫層を業者が買い取り、掘り下げ骨材として販売している。

